

---

Untitled

# [物語に記号はいらないというただの言い訳]

七浦彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Untitled

「物語に記号はいらない」というただの

### 【言い訳】

### 【ZINE】

N5193A

### 【作者名】

七浦彩

### 【あらすじ】

風変わりな男の元に孤児院から少女がやってきた。

A Alice

「今現在自分の置かれた状況を把握できる力」

はじめましてこんにちは。男は少女に向けて笑いかけた。どこかひょろりと頼りなく、そのくせ存在感だけはたっぷりとあるような。例えるならば冬の向日葵を思わせる風貌であった。

少女ははじめて、と返して、男を見つめた。そして、どうしても気になったことを、問う。

いくら出したんですか。

人が人を貰い受けたる時、特に自分のような子供が人から人に渡る時、いくらかの 決して少ない額ではない 金が動いていると いうことくらいは、少女も知っていた。そして、大抵貰われて いく子供たちはこざっぱりとした服を着た、相応の年を取った人間の手を引かれてどこかに去つていったことも。

さてね。無邪気さを残した顔で男が笑う。

君はいくらだと思う?

少女はしばらく考えて、小首を傾げる仕草をした。邪魔もの、厄介もの扱いを受けないための愛らしさはそれでも残つていたのだった。少女はさらに考えて、それから、腕を大きく広げて、振り回した。

これくらいの、クマさんと同じくらい、かな。

男は顔をくしゃくしゃにした。君がそう思つならその通りだよ。少女に足りなかつたのは、金銭感覚。

B Bed

「眠る場所 嘗む場所 あたため合う場所」

男の家に着いたのは夜が更けてからのことだった。森の中にひつそりと隠れるように存在するその家は夜の闇の中では全容がさっぱりとわからなかつた。

最初に少女が通されたのは、大きなベッドのある寝室だった。男が一人、いや四人くらい寝そべつても大丈夫だろう、と思われるようだ。

僕はね、と男は言う。悪い夢を見た後に、目覚めてもまた真つ暗つていうのが大嫌いだつたんだ。だから君みたいないい子が来てくれたなら、きっと独りにはさせないと、そう決めていたんだけど。

男が言葉を切ると、小さく、間が空く。

……でも君が嫌なら強制はしないよ。だから今日はここでじづじづおやすみ。僕はここにいるからね。何かあつたら起こすんだよ。

男は言うだけ言つと、やけに凝つた意匠の、固くて小さなソファに横になつた。そしてすぐさますすりと寝息を立て始める。

少女は落ちつかなげにもぞもぞとベッドの中で何度も寝返りを繰り返した。こんなに柔らかくて、こんなに冷え切つた布団は初めてだつたのだ。

床に転がされて眠つた時でも、誰かしらが隣にいてくれて、人肌であたためてもらつて、それで、眠れた。

自分は幸福になつたのだろうか、それとも不幸になつたのだろうか。少女はそれを繰り返し考へて、いつしか眠りこんでしまつた。

C C h o c o l a t e

「世界一脆くて扱いづら~いお菓子」

放り込まれた茶色のかたまりは、口中でとろつとろけた。悪いことをした時のおしおき。どうにも自分はこの甘さと、それから

すぐに融けてなくなってしまう感触が苦手だ。

手に持てばべと不愉快だし。どうして友人たちは嬉しそうに食べているのかわからなかつた。

そんなに食べ過ぎて、自分がチョコレートになっちゃつても知らないよつ

「冗談で口にした言葉のつもりだつた。だが「それ」は微笑む友人たちの目の前で大きく膨れ上がり、自分の飲み込んで、包み込んで。息ができなくなる。

## D - D e l i c a t e

### 〔特に氣をつけねば年頃の女の子〕

男は少女の小さな手が自分の体を振り動かしているのに氣付き、目を覚ました。恥ずかしそうに、涙の線を「じ」と拭つてゐる。どんな夢を見たの。それは優しさからではなく、好奇心から来た質問だつた。彼女が恐れることはなんだらう。それをまずなにより先に知る必要がある氣がした。

少女はためらつて、消え入りそうな声で答える。

……チョコレートがおそつてきたの。

チョコレート。

興味深い、と思いながら男はまだ震えている少女の頭を撫でる。おやつはチョコレートの入つていないものを慎重に選ばなくては。笑わないのね、と尋ねて来た少女は、不思議そうな顔をしている。笑わないさ。面白いとは思つけれど。

少女は少し不満げな表情になつて、ベッドに引き返した。面白い、といふ言葉は間違いだつたらうか。慰める意味で、子守唄を歌つて、一緒に眠つてあげようか、と言つと、お断り、といふ答えが返つてきた。

君は賢明だね。男は口の中で呟いた。

「見つけるのは難しく、保持するのも難い」

少女が再び目を覚ますと、コーンスープの匂いが何処かしらから漏れていた。

朝日に照らされた寝室は、よく見ればあまり綺麗とは言えなかつた。本当に寝室であるだけ。ベッドだけが綺麗にメイクされてあつて、後は何がしかの器材が転がっている。よくもまああの闇の中足をひっかけなかつたことだ、と少女は思つた。

そういえば、男と会つたのは夕刻で、それからずっと何も食べていなかつた。

少女は足を精一杯に伸ばして、靴を履くと昨日から着たままの服を脱いで、別れの際に皆からもらつた服に着替えた。白いワンピースだつた。とつときの素材を使つてているのであらう」とが手触りからわかつた。

初めて触れた感触はどうとも言えず、困惑した。鼻をくすぐる新しい布の匂いも何かが違つ氣がした。

靴とも合つてないし。そもそもこれでは走り回れない氣がする。少女がこれを脱ぐかどうか思案する間に、朝食の準備が出来たと男が扉を開けた。そうしてそのワンピースを着た少女に目を止め、柔らかく微笑む。

似合つてゐるよ。

本当?

少女はうきうきと裾を翻し、くるくると舞つ布の感触を楽しんだ。なんだか足取りが軽い氣がした。

その綺麗な服に見合つだけのフルコースを作つてあげられればいいんだけど。

男の弦きには答えず、少女は自分の一挙手一動足に合わせて体に

やつくりと馴染んでじくワソピースに、喜びを感じた。

## F First

「 肝心ではあるが意外と忘れがち 」

食卓に着くと、手際よく男が湯気の立つ食事を少女と自分との皿の前に置いた。そこにあるテーブルや椅子はベッドやソファと同じように意匠だけ凝りに凝っていて、よく磨かれていて美しくはあった。

ただそれが本当に「生活」というものに結びつかない。よく見に行つた異国館のようだと少女は言つた。異国の家がそつくりそのまま残されていて、調度品などには手を触れないで下さい、と書かれているような。そうして残されている、機能を忘れた家。言われて男は皿を細めて辺りを見渡す。

使うことなんか考えてなかつたからね。みんな一皿惚れ。欲しいものを選んだらじつとなつた。

男は事も無げにそらりと言つた。

ああ、なんか……そういうこと、しそうだな。コーンスープをぐるぐるとかき混ぜ、少女は思つた。コーンスープに映る自分の顔が、ぐにゅぐにゅにゅうじとスプーンに翻弄されている。

もぢりん、

少女は男にみなまで言わせず、固いパンを口に押し込んだ。おかしな男だという最初の印象はいまだ変わらなかつたが、それでも男に好感を抱き始めている自分に、少女は気付いていた。

## G Game

「 時々それは凶器ともなり得る 」

それからずつと、簡素な朝食を摂る間、一人はどちらからも一言も発しようとはしなかつた。

男はそれが癖なのか、あまり咀嚼をせず無理やり流し込むように食物を飲み込んだ。飲み込む前に三十回噛みなさい、が身に染みている少女にはそれがあまり好ましいことではなかつた。

少女は背筋をきちんと伸ばして、これこそ理想の食事像だ、と言わんばかりに、精一杯幼いながらも徹底したテーブルマナーを披露してみせた。男は感心したようにそれを眺めていた。

男の持つたフォークが大皿に盛り付けられたサラダの中の特に赤々としたトマトにふすりと刺さつて、少女の手が取り皿に伸びて、取り分けずにそのまま口へ、ゆで卵一つスライスオニオンの切れ端一つ見逃さないように丁寧にドレッシングをかけて。

パンをそのまま齧る。手で小さく千切つてジャムが垂れないよう

に注意する。

コップに注がれた牛乳を飲むのにはさすがにマナーも何もなく、二人とも同時に飲み干して、ふは、と息をついた。

……いい加減、観察のし合いはやめようじゃないか。

ぐつたりとした表情で男が告げた時には、少女ももう疲労困憊といつた具合になつていた。

そうして朝食は片付けられていつた。

## H Habit

「自分ではないつもりでも他人から見れば」

退屈しのぎに広い館を歩きまわるうちに、少女は男の選んだものはほとんどが使用目的ではなく、眺めて堪能するための物のような壊れやすそうな細工がしてあることに気付いた。

あやふやな物が好きなのかもしれない。少女はきっと熱い料理など乗せられないだろう薄いガラスで作られた皿を眺めて思う。

男は少女が目を止めるもの、手に触れるもの、特に興味深げに眺

めていたものに目を走らせた。

一見様々なものをゆっくり観賞しているように見えるが、少女が手に取るものは大抵あまり装飾のない、それでいて古びたもの、一昔前のデザインのものが多いように思えた。

シンプルなものが好まれた時代だつたな。申し訳程度のワンポイントが刻まれたものとか。一昔前の流行を思い出し、男はまた少女の挙動に目をやつた。

一人とも、互いのことを少しづつ知りはじめてはいたが、自分に関してはことに無知であった。

そうしてそれを相手に指摘されるまで、ほとんど気付かずにいた。お互いを知る前に自分から、ね。

少女の悟ったような物言いに、男は軽く吹き出した。

## I Interest

「引かれるのが最初。惹かれたらおしまい」

そういえば、この男はどうやってこれだけのものを手に入れられるほどの財を得たのだろう。

ふと、少女は真っ先に思い浮かべるべきだったことを考えた。

風貌はどこかしら世捨て人のようだ。自分の身なりというものに気を使っていないように見える。しかしこれだけの調度品の選びよう。もしかして自分が知らないだけで、彼は名のある芸術家か何かではないだろうか。天才ほど変人が多いというし。

けれど、そうだ、例えばこんなこともあるかもしれない。これらはみな彼の両親が遺したお金で買ったもので、寂しさを紛らわすためにたくさんのお金を使って、それで、とか。少し前に読んだ話だ。少女の想像はどんどんと飛躍していき、ついにはじわりと涙を浮かべるに至った。男は、家を散策していた少女がいきなり泣き出したことにぎょっとした。

どうして泣いているの。男が必死になつて訊ねても、少女はうつむいて口を閉ざしたままだつた。少女自身、なんで泣き出したのかさっぱりわからなかつたからだ。

### J-Joke

「時と場所と相手は細心の注意を払つて選ぶこと」

チョコレートの夢でも思い出した?  
少女は首を横に振つた。  
ここにいるのが嫌になつた。  
また横。  
ホームシックだ。 そだらう?  
横。

こういつ時の子供とは面白いもので いや、本人は必死なのだから面白がつてはいけないのだろうけれど 慰めようと必死になればなるほど、激しく泣き出すものだ。男はそれを知つていた。

氣を紛らわせなくちゃ。

すっかり弱りきつた男は、ひょいとしゃがみこむとその細い指で少女の脇腹をこちょこちょとくすぐつた。

少女は泣き止んだが、ひどく不機嫌になつたことは言つまでもない。

男は子供の泣きやませ方は知らなかつた。

### K-Knowledge

「しかしそれが役に立つかどうかは別問題」

まったく、子供、しかも女の子は厄介だ。少女に思い切り殴られた頭を擦りながら、自室に引き返した。こうこう時は放つておくほ

うがいい、と、思った。

少女は寝室に引き籠もつて、布団をかぶり男に對して無視を決め込んだ。あんなつてしまつては、どうしようもない。

男は机に腰掛けると、少女が来ると決まつた時に買つて、少女を迎えに行く際に放り出したままになつていていた本を開いた。

どこまで読んだのだったか。挟んでいたはずの栞が何故か床に落ちていてるのでさっぱりと思い出せない。

ぱらぱらとめぐる内、内容が思い出されてきた。

ありふれた陳腐な恋愛小説だった。本の装丁に惹かれて購入したはいいが、どうにも台詞回しやら文体やらが臭すぎて斜め読みをしていた。

少女のお腹が空いて、昼食の時間になるまでには、いい時間潰しになるだろう。男はぱらりと頁をめぐる。

どうかわたくしの愛だけを見てくださいましわたくしにはなにも必要ありませんあなたさまがいてくれればもうなにも恐れるものなどないのですわおおよくぞ言つてくれたならばわたしは全てを投げ打つてそなたとともにここにうなにもいらないそなたさえいればそなたさえ。

そういうえば と、男は本を閉じて、また違つ本を手に取つた。今さつき読んでいた本よりは遙かにマシではあるが、やはり装丁に惹かれたために内容には満足できていない、冒険小説。

最後のシーン、異界に投げ出された主人公が壮絶な冒険を繰り返し、ようやく元の世界に戻ることのできる場面。その物語の主人公は涙をたた湛えて叫ぶ。

ぼくはこの記憶があれば、何があるつともきっとこれからも生きていけるよ。さよならぼくの大切な、たつた一握りの、仲間たち。君たちさえ元気なら、ぼくは。

そうして主人公は全てを伝えられないまま冒険を終える。そういう物語。

何かを思いついたかのよう、男は本を置いて寝室に向かった。

う

もや、と布団の中で少女が身をよじつた。

僕には君が必要だ。君さえ笑つていてくれたなら何もいらないよ。思いつきで試した言葉は宙に浮いて、男はたつた今言つた言葉を消す方法はないものかと案じた。

枕が顔に飛んできた。ばふんと鼻に直撃したそれを拾い上げて、少女の方を見ると、布団が細かく揺れているのが見えた。そうして、少女の笑い声が漏れでき始めたのを聞いた。

不機嫌を直す方法はわかつたが、一度とやつたくはないな、と男は思った。

## L L a z y

### 〔必要な行為であり自然な状態〕

先ほどどの発言で落ち込んだのだろうか、男がばつたりと自室に入つたまま出てこなくなつたので少女は少しあり過ぎただろうかと不安になつた。

そつと男の部屋に入ると、他の部屋よりも埃臭く、装丁だけで選んだのであらう本の山が積み上げられていた。

男は机につつぶしていた。椅子の近くに、見覚えのある恋愛小説があるのを見て、少女は小さく笑つた。ぶすつとした顔が少女に向けられた。

なんだい。またチョコレートかい。

チョコレートはもう言いつこなしよ。それよりわたし、昼寝がしたいのだけれど。あなたと一緒に。

思いつきで言つた言葉に、男はあまり興味のなさそうな顔をした。どこでどんな風に？

ああ、ここに来る前にソファだらけの部屋を見つけたの。あれを二つ、どれか持つて行って、外でひなたぼっこしながら眠りましょうよ。幸い今日はよく晴れているわ。

面倒くさいよ。

少女はとつておきの笑顔を見せた。

本気でお仕事をした後のお昼寝つて格別なのよ。知らないの？  
それにたまには虫干しをしてあげましょうよ。ゆっくりでいいわ。  
そうね、そうしてクッキーか何かをつまみながらお話ししましょう。  
お昼ご飯がクッキーなんて夢みたい。

まくしたてると、少女はその「ソファだらけの部屋」に向かって歩き出した。例え一人でも、その提案を叶えると、そんな強気な背中を見て、男はようやくふらふらと立ち上がった。少女の背丈の三倍もあるソファだつてあつたはずだ。壊されてもいやだし、少女が怪我をするのも嫌だつた。

思いもかけなかつた重労働。だが男は満足そうに笑つてそれをやりとげた。

そうして少女と男はそのままだらりと眠り込んだ。時々目を覚ましては、クッキーの缶に手を伸ばしながら。

M M y s t i c

〔それはひどくあやふや〕

上質の檻を黒く染めた骨組みと一昔前に流行つた、ほとんどが無地でほんの一箇所にだけ申し訳程度に柄が描いてある布。

少女が選んだソファはやつぱりそういうつたもので、布地部分が少なくこつこつして痛いだろうにそれでも眠り続けている。

少女が身じろぎすると、布に刺繡された蝶が中途半端に隠れて、上から覗けばきっと少女に蝶の羽根が生えたように見えるだろう格好になつた。

惜しむらくは男も少女もその一瞬に気付かなかつたことだ。

貴重な一瞬は、大きな欠伸とともに搔き消えた。

## 「誰だって未開の地は恐ろしい」

ようやく一人が満足して目を覚ました時には、日も傾いて空がほんのりと赤く染まり始めていた。

寝すぎちゃったねえ。いつの間にか男がかけてくれたらしい毛布をたたみながら、少女は笑った。

こんなにだらだらと眠つたのは久しぶりだ。男も満足げに起き上がった。

しかしそく眠っていたな。男は少女を、少女は男を見て思う。やつぱり緊張させてしまつたんだろうか。言葉には出さないまでも、二人はお互いを見て、思う。そういうえば昨夜は随分と気を使わせてしまった。自分のせいでよく眠れなかつたのかもしれない。

男は、少し寒くなつたね、と自分の上着を少女に着せかけると、ソファは僕が片付けておくから、先に中に入つておいで、と促がした。

少女はその言葉に従つて家の中に入つていった。男は安堵からであらう、小さな息をついた。出会つたばかりの、何も知らない。そのことを思い出すと、今まで少女に対して取つてきた行動がやけに調子付いたものだつたようだ感じた。

少女もまた、独りになつて、小さな手で胸を押された。まだ一日。一日目のになんて態度を取つてしまつたのだろう? 我儘な子供だと思われていやしないだろうか。放り出す権利は向こうにある。ここに置いてください、なんて言う権利は自分にはない。そのことに、初めて気付いた。

どうしたらいいんだろう。困り果てて、二人は家の内と外とで、大きく大きく溜め息を吐いた。お互いに、こんな状況に出会つのは、生まれて初めてだった。

## O O t h e r

「どれだけ信じあっても人は一つにはなれない」

男はソファを片付け終えると、どうしたものかと少し血室にこもつた。少女は食卓に姿を現さない男のことを思つて、溜め息をついた。

今さらだ。

けれど一つ間違えたなら。

それでも。

今までの時間を否定はしない。

けれど?

今自分は独りで。

そして。

昨日出会つまでも独りで。

それに……

相手とは年も性別も生まれた場所も違つ。

だからこそ

……もつと知りたいと願つたんじゃなかつたか?

二人は何事もなかつたかのように、仲良く夕食の準備を始めた。男の目から見える少女は、朝見た通り男を興味深そうに見ていて、好奇心旺盛でそれでいて少しだけ同じ年頃の子供より口達者な少女で、少女から見える男は、少女を初めて見る生き物のように優しく、けれど観察対象として扱つてているような、少し頼りなげな笑顔をする男だった。

「この世界に「つとない、大事な」

一人で夕食を作ると、ひどく手間取つて普段の一倍の時間がかかるつた。男は面倒がつて芋の皮を分厚く、その上完璧に剥かないまま鍋に放り込もうとするし、少女は初めて見る調理器具に慣れず悪戦苦闘するしで、お互いに注意し合ひ、けれども、笑い合いながらの調理となつた。

シチューに入れるはずだつた芋はポテトマッシュに興味を持つた少女のおかげでマッシュポテトに変化した。マッシュポテトに使つたためにバターと牛乳が足りなくなつて、シチューはメニューから消えて、といつた具合に男の計画は「ことごとく少女によつて潰されてしまつたが、それでも怒りはせずむしろ楽しそうに見えた。

時間はかかつたものの夕食はどうにかテーブルに並んだ。

二人は朝食の時よりも多くの言葉を交わした。そのせいで少しばかりマナーの悪い食べ方になつていたとしても、誰も咎める者はいなかつた。

何より一人ともが満足げにしていたので構いはしない。

Q Quarter

「完全なものだけが素晴らしいと誰が決めた？」

夕食を食べ終えて外に出た二人が見たのは、細く尖つた月だつた。満月も綺麗だけれど、三日月の方がわたし好きよ。少女は繋いだ男の手をぶらぶらと揺すりながら言つた。

どうして？ 男が発する言葉は、どうして、が多くなつた。少女のことを知りたいという思いがそこに込められていた。

そうね、完璧にまんまるだと、なんだか太陽に負けてしまいそうじゃない？ あっちの方があつたかいし、強いし。変化するからこ

そ月は太陽と張り合つていられると思うのよ。

そういう考え方もあるのか。男はそれを聞いて、少し意地悪なことを思いついた。この少女はきっと月は太陽に照らされているからこそ輝くことができるのだと知らない。太陽がなければ月は輝くことができない。張り合つどころか太陽と月とは平等でもなんでもないんだと、そう告げてみたらどうだろう。

それにしてもどうして月は丸くなったり細くなったりするのかしら？ 少女の問いに、男は答えた。それはね、地球が太陽の周りを公転しているからで月は地球の衛星であつて云々。

少女は首を傾げた。

であるから月つていうのは太陽と同じように空にはあるけれど地球から見れば距離はとても近くて太陽はずつとずつと長い時間をかけなくちゃ行けなくてそれから云々。

よくわかんないわ。

少女は男の言葉を遮つて、言つた。  
まとめる。

少女は得意げな表情で男を見上げた。  
それでもなんでもお田さも月も綺麗だから別にいいよねつてことでしょう？

男は微笑んで頷いて、心の中で、負けました、と呟いた。

R Ramb1e

〔最も愛すべき時間と行為〕

ついでだから外を散歩してくるかい？ 男の提案に少女はすぐに頷いた。

夜露に濡れると悪いし、草の汁がその服を汚すといけないからね。男が貸しただぼだぼの上着とズボンを、少女は必死にまくりあげた。服からは、クロゼットの埃っぽい匂いと、表現し難い、例えるなら、

新品の本を開いた瞬間のような、そんなかすかな香りがした。それは紛れもなく少女にとつて世界で一番好ましい、隣に歩く男の匂いだった。

虫の声がおかしな一人を森の中へと招き、ふくろうがそれを拒んだ。

おうるるる、ほつおう、おうるるる、ほつおう。

「ゴー・ホーム」　……　おうちへお帰り……。『ゴー・ホーム』……

夜まで遊んだりと、決まってこの声がして、捕まつて。そしてお尻をこつぴどくひつぱたかれた。チヨコレートをひとかけ口の中に入れるのも忘れずに。

少女は男をちらりと盗み見た。男は視線に気付くと、疲れた?と尋ねて来た。夜に一緒に出歩いてくれる人は初めてだ。みんな嫌がつてたのに。

大きく首を横に振つて、少女は、もつともつと先に行つてみましょ、と言つた。小さなカンテラに照らされて、足元はふわふわとそこだけ切り取られたように光つて浮かび上がる。

『ゴー・ホーム』。

……嫌だよつ。

ペロリ、と舌を出すと、ガサガサとふくろうが飛び立つ音が聞こえた。

あ。

勝つた。

少女はそれが嬉しくて、男の腕にしがみついた。男は少女が唐突なその羽音に怯えたのかと思い、少女の頭を優しく撫でた。

暗闇もふくろうも森も。ふわふわと頼りない明かりも。

何故か少女には、愛しくてならないもののような、そんな風に思えた。

光る足元に合わせて、少女は小さくステップを踏んだ。可愛らしい声で、歌を歌いながら。

## S Song

「それに意味を求めるのは最も愚かな行為」

デジイ・スワイディ  
イロウル・アロウル  
シェンナ・ミヒンナ  
ルータス・ロータス  
おませな帽子  
いじわるりんご  
おしゃまなジャムびん瓶  
ごちやませてぽい！

デジイ・スワイディ  
イロウル・アロウル  
シェンナ・ミヒンナ  
ルータス・ロータス  
小指の先に  
お砂糖ひと壺  
素敵なまじない  
ごちやませて決めた？

サロリア・リンリア  
サロリア・リンリア  
アロエラ・ナルエラ  
アロエラ・ナルエラ  
飛んだけ飛んだけ  
飛んだけチヨコレート！  
おいでおいでよつといで  
素敵なパパママ！

## T Tale

「あやふやで意味のなさそなもののぼり」

少女が満足して歌を歌い終えると、男は楽しげに、それはなんだ  
い、と訊ねた。少女は、なんでもないのよ、ただのおまじない、と  
答えた。

聞いたことがない？ 嫌いなものはサロリア・リンリアっていう  
おばけが吹き飛ばしてくれてね、欲しいものはアロエラ・ナルエラ  
っていう妖精さんが持つてきてくれるの。  
男はそれを聞いて、ゆっくりと歌詞を反芻した。

すると、君は素敵なパパとママが欲しかった？

少女はそれを聞いて、激しく首を横に振った。少しだけ、男が悲しそうな顔をしているのを見て、必死で言い募った。

欲しいものなんてなかつたの。だからみんなが歌つてているのを真似たの。チョコレートは飛んでいつて欲しかつたの。ほんとよ。でも全然飛んでいかなかつたわ。素敵なパパもママも、来なかつたし。いらなかつたし。

そうか。

男はちょっと無理やり気味に笑つた。

チョコレートがすぐになくなるといいね。

男の声に、少女はうつむいて、少しだけ鼻の頭を赤くした。でも、この歌、結構叶うのかもしれない。

誰にも聞かれなかつた歌。心の中で歌つていた歌。

アロエラ・ナルエラ。

大好きと思える人をください。

## U Unaltered

〔それは絶対とは言えないけれど〕

繋いだ手は離さないまま、二人はするすると森の中へ分け入つていつた。

すっと涼しい香りが広がつてきた。それと、甘じとなく甘い香りも混じつている気がする。

こんなに早くここに来ことになるとは思わなかつたなあ。

男は感心したようにひとりごちた。少女はその言葉の意味がよくわからず、きょときょと男と自分の足元とを見た。

僕は素敵なパパでも、ましてやママでもないけど、チョコレートをこの世界から全部吹き飛ばすこともできないけれどね。

男は歩みを進めながら言つ。

君と一緒に楽しく過ごしていきたいなって、今日一日を過ごして思つたんだよ。

少女は、それはわたしのセリフだわ、と思いながらも、口をつぐんでそれを静かに聞いていた。

本当はね、ここは秘密にしておきたかったんだ。だから、君が秘密をずっと守れる子かどうか、調べるつもりだつたんだけど、うん、大丈夫だ。きっと、大丈夫だ。

独り言のような男の言葉に焦れて、少女は、一体なんなの？ と少し怒つたような口調で訊ねた。

ほら。そんなに怒らないで。着いたよ。

男は言うと、暗闇の中にカンテラから移した小さな火種を暗闇の中に放り込んだ。

次の瞬間、ふわり、と炎が揺れて、消えた。かと思うと、炎のような青く白く赤く黄色に縁に紫にゼリー・ビーンズみたくキャンディみたく様々な色で発光するものが大きく、小さく揺らめいて、上へ下へと移動し始める。

それはくるくると舞い踊つて、揺れた。よく見ればずっと下に猫の爪に似た黄色い切れ目が……。さつき見上げた三日月が見える。湖だ。少女が理解するまでに舞う光は増えて、湖面に揺らめいて、静かに騒ぎ立つていた。

炎に反応する虫なんだよ。なんでこんな色で光るのか、どうしてここにいるのか、誰も知らない。だつてこの虫がここにいるのを知つているのは僕だけだからね。

呆けて言葉を無くす少女に、ゆつくりと男が語りかける。

ここだけは僕だけのものにしたかったんだ。誰にも何も言わなければここは変わらず綺麗なままだから。でも、よくわからないけれど、君に教えたいたい気がしたんだ。

少女は夢を見ているような心地でこくこくと頷き続ける。

秘密。一人だけの。

一人だけの。少女は目に映る極彩色の光を追いながら、そつと男

の手を強く握った。男も強く握り返した。

承諾。言葉はもう必要なかつた。

## V View

「時に、フィルター、と呼ばれることも」

行きよりもさらにに頼りない足取りで歩く少女の手をしつかりと握つて、男は歩調をさらにゆっくりと緩めて歩いた。

初めて教えた秘密の場所はいつもより綺麗に見えた。楽しげに見えた。迎えてくれるように見えた。

一緒にその光景を見た少女はまだぼうつとしている。どうだつた、と訊ねたい気もしたが、言葉にしてしまつては今の昂揚した気分も一緒に消えてしまいそうな気がした。

今日はすごくよく眠れそうだね。

あんなにたくさん昼寝したのに、すごくいい夢を見られそうだよ。こんなに楽しい一日を過ごしたのは初めてだ。

それもこれもきっとみんな君のおかげ。

君に会えてよかつた。

明日も、明後日もずっとずっと。

楽しく過ごしそう。

男の目には、そんな未来の光景がまざまざと、まるで手に取ることができるくらいはっきりと映つていた。

## W Word

「閉じこもつてしまつよりも創り出す方がいい」

家から零れる明かりが一人を迎えた。中では誰も待つてはいないと一人とも知つてはいたが、一人にとつて、眞実に「ただいま」と

言える場所がそこにあった。

ただいま、お帰り、をお互いに言い合ひつて、一人は柔らかく笑い合つた。

ただいまを言える場所こそが安らげる場所なのだと、一人は初めて知つた。

世界にたつた一つ。

一人だけしか知り得ない世界。

それがなんとも心地のよいものに感じた。

X Xanadu

〔案外と近くにあるが氣付かづひこ〕

それじゃあおやすみなさい。

寝巻きに着替えた少女は、幸せそうにベッドの中へ潜りこんだ。

ああ、良い夢を見られるといいね。

男は答えて、またソファに寝そべつた。

沈黙が暗い部屋の中に落ちた。

ねえ。

少女がベッドの中で身じろぎする。

ねえ、もう眠つちゃつた?

いや、まだ眠つていないよ。男はすぐに答えた。

ねえ、明日はこここの掃除をしましちつね。それからまた一緒にごはんを作りましちつ。いっぱい、いっぱい、やりたいことがあるの。うん。僕も君にたくさん見せたいものがある。服も買ってこひよつか。それともクッキーを買い込んで来なくちゃならないかな。今日食べきつてしまつたからね。

そうね。いっぱい食べちやつたものね。ちょっとくらい残しておけばよかつた。

さあ、もうお休み。明日のことは明日考えよ。

また、沈黙が落ちた。

ねえ。

なんだい。

わたし、もうチョコレート怖くないかもしない。  
なんで？

なんとなく。もう溺れないと思うの。

そうか。それなら、いい。

そして、沈黙。

ねえ。

うん。

そつち行つてもいい？

男は大きく吹き出した。

それじやあ狭くて痛いじやないか。

じやああなたがこつち来てよ。

いいよ。君がいいんなら。

手を繋ぐ。沈黙。

そうして、二人はすとんと眠りの中にござな誘われた。

Y Years

「過ぐるのは早い。過ぐすのは遅い」

昔々、少女と男どが森の奥深くで楽しく一人きりでずっと幸せに暮らしていました。

Z Zipper  
「開けつ放しは非常にみつともない」

「の一人のお話は、ここでお終い。

了

(後書き)

全然短編ほくなくてすいません。長かったでしょう。お疲れ様でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5193a/>

Untitled [物語に記号はいらないというただの言い訳]

2010年12月14日17時20分発行